

Nakamura, S., F. Shishikura, T. Takagi,
S. Iwanaga, K. Takahashi, and K. Sekiguchi

1st International Biochemistry Meeting: Frontier in Protein Chemistry.
Honolulu (1979)

- 15) The Primary Structure of Horseshoe Crab (*Tachypleus tridentatus*) Coagulogen and Its Homologies with Platelet Factor - 4.
Takagi, T., S. Nakamura, Y. Hokama, T. Miyata, M. Niwa, and S. Iwanaga
VIIth International Congress on Thrombosis and Haemostasis. London (1979)
- 16) カプトガニのコアグュローゲン：4種コアグュローゲンのゲル化機序及び構造比較
中村 伸・宍倉文夫・関口晃一・高橋健治
日本生化学会第52年回大会 東京 (1979)
- 17) 霊長類の分子進化：フィブリノペプチドによるアジア産マカク属8種の分子系統樹
中村 伸・竹中 修・高橋健治
日本動物学会第50回大会 東京 (1979)
- 18) 血液凝固蛋白質を分子指標にした現存カプトガニ4種の系統解析
宍倉文夫・中村 伸・高橋健治・関口晃一
日本動物学会第50回大会 東京 (1979)
- 19) 霊長類の分子進化Ⅱ：フィブリノペプチドのアミノ酸配列比較に基づくオナガザル亜科5属の系統解析
中村 伸・竹中 修・高橋健治
第24回プリマテス研究会 犬山 (1980)
- 20) アズキトリプシンインヒビター IIa の一次構造
石川雅佳子・坂田憲昭・中垣千穂・渡辺一江・中村 伸・高橋健治
日本薬学会第100年回大会 東京 (1980)

系統研究部門

江原昭善・野上裕生

相見 満・瀬戸口烈司

当研究部門が目指す霊長類の系統研究は、幅の広い視野と研究活動が要求される。現在の部門スタッフだけで、その要求される全領域をカバーすることには限界があるが、各スタッフが各々の専門を中心に、所内・外の研究者と積極的に協力し、あるいは中核となって、共同研究を推進している。このような学問的必然性から、一見専門的に分極化してみえる当部門も、霊長類の系統学という座標軸の中でみると、主要な位置に収まっているということが出来る。

以上のような当研究部門の性格とあいまって、海外学術調査も多忙をきわめる。アフリカでは、江原、野上の他に独協医大の馬場悠夫氏が参加して、エチオピア地溝内における化石霊長類のフィールドを調査し、その結果をふまえ、1980年度には、江原・柴田博(名大)・山崎恒哉(南山大)のチームで、ひき続き発掘調査を行なうことになっている。

一方、東南アジアでは、社会部門の川村俊蔵教授を中心とするスマトラ自然研究が、インドネシア国のアンダラス大学と提携して推進されることになり、野上はその推進のため尽くしている。江原・相見はアンダラス大学のA. バカール講師とスマトラ生息の各種霊長類の形態学的研究を、野上・相見はスマトラ第四紀化石の研究を計画、1980年度中に実施の予定である。また、相見は帝京大の渡辺直経教授を中心とするジャワ・サンギランの含人類化石層の調査隊の一員として7月から2カ月間、インドネシアに滞在することになっている。

瀬戸口は1979年から3カ月間、南米のコロンビアにおける発掘調査隊にメンバーとして参加し、多数の南米有蹄類・有袋類・啮歯類の他に、霊長類化石スタートニヤの上顎臼歯を発見し、将来の発掘調査継続への引き金ともなっている。

国内的には、各種霊長類の標本収集の他に、中部日本のファウナの骨格資料収集にも意を注ぎ、かなりの数の哺乳類骨格を入手した。これらのファウナ資料を基に現在、東海地方各地の先史遺跡

から出土する人骨や動物骨の調査研究も併わせ行ない、当地方の地域研究の各グループに貢献している。

研究概要

1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究

1. ヒトおよび霊長類下顎骨の機能的・形態学的研究
2. 霊長類の性的二型の形態学的・行動学的分析
3. 行動の開発因となる形質の形態学的・系統発生学的研究

2) スマトラにおける現存霊長類の形態学的研究

江原昭善・相見 満・
アムシール・バカル(アンダラス大学)

3) エチオピアにおける鮮新世-最新世霊長類の総合研究

江原昭善・野上裕生
馬場悠夫(独協医大)

4) 東海地方先史遺跡出土の人骨・動物骨の研究

江原昭善・相見 満・木下 実

5) 硬組織の形態学的研究

野上 裕 生

1. 歯牙・骨組織等の電子顕微鏡像に基づく形態研究
2. 家畜および野生種におけるエナメル質の発達変異

6) インドネシア国スマトラ島における第四紀地史研究

野上 裕 生

7) インドネシア国ジャワ島における第四紀哺乳類の研究

相 見 満

8) 第三紀食虫類・原猿類および有袋類の研究

瀬戸口 烈 司

1. 南米出土化石について
2. アジア出土化石について
3. 南・北アメリカ大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

総 説

1) 江原昭善(1979): 身ぶり言葉と話し言葉と。

平凡社アニマ

2) 江原昭善(1979): オナガザル類のルーツを求めて。モンキー 18 巻 168 号

3) 江原昭善(1980): 人類の進化と北京原人。自然科学と博物館第 47 巻第 2 号

4) 瀬戸口烈司(1979): オーストラリアに直立猿人がいた可能性 — 生物地理学的考察。

生物科学 Vol. 31, No. 4, 岩波書店

5) 相見 満・瀬戸口烈司他(1980): 蛋白分解酵素を用いたサル類骨格標本作製法の開発。京大霊長類研究所

学 会 発 表

1) 江原昭善(1980): 旧世界ザル各分類群の下顎骨の形態比較。第84回日本解剖学会。

2) 江原昭善(1980): 霊長類頭骨の基本構造と食性への適応。

第 9 回ホミニゼーション研究会

3) 渡辺直経・相見 満・鈴木正男・松浦秀治(1979): ジャワ・サンギランの含人類化石層

4) 瀬戸口烈司・渡辺 毅・毛利俊雄(1980): 南米コロンビアで発見されたスタートニヤ(中新世後期)の上顎臼歯について。

第 24 回プリマテス研究会

報告その他

1) 江原昭善(1980): 霊長類とくにニホンザルの「て」の使用。昭和53・54年度科研費補助金総合A「適応動作の生理学的・行動学的研究」研究成果報告書

2) 江原昭善・相見 満・木下 実(1980): 愛知県西尾市枯木宮貝塚出土人骨および動物骨について。中間報告書。西尾市教育委員会。

幸島野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・
森 明雄

幸島野外観察施設も新設されて十余年を経過し、安定した運営が続けている。幸島生息のニホンザルの群れの総数は、後述のマキグループも含め、1979年3月末現在97頭であり、そのほかに2頭(ボーゼ, ハト)ほどのソリタリーがいるものとみられる。また、1980年3月末現在は95頭のほか、3頭(ノソ, ボーゼ, ノロマ)ほどのソリタリー